

Title	タイ語の時と出来事の表現
Sub Title	Expressions of time and event in Thai
Author	峰岸, 真琴(Minegishi, Makoto)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.54 (2023. 3) ,p.347- 362
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000054-0347

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

タイ語の時と出来事の表現

峰 岸 真 琴

1. はじめに

本研究の目的は、タイ語の句末詞leewの分析を例として、「時と出来事」の観念の表現の考察を行うことである。以下では、時の流れ上の瞬間である「時点」と、一定の期間にわたる「時間」とを合わせて「時」と呼ぶ。

言語における「時」の表現様式の研究の前提には、Comrie (1976), (1985) に代表されるような動詞および動詞句の「テンス・アスペクト・モダリティ」(以下では、Tense, Aspect, Modality に相当する形式類を、それぞれ「T形式」、「A形式」、「M形式」と、これらを併せて「TAM形式」と略称する) という文法カテゴリーの分析がある。タイ語を始めとした東南アジア大陸語の諸言語における孤立語の分析も、主として西洋近代語の分析を念頭に行われてきた結果、孤立語にはT形式がないとされてきた。

Comrie (1976), (1985) のTAM形式の分析の枠組みには、発話時を叙述の基点とするT形式が、A形式の分析(あるいはM形式の分析)の基盤であるという暗黙の前提がある。このことは西洋近代語のA形式、M形式のそれぞれが「現在完了形、過去完了形」「法助動詞の現在形、過去形」というように、「時制の対立」を持つことにも反映している。つまり、Comrie (1976), (1985) の枠組みによるA形式、M形式の分析は、「発話時点」に代表される「時」の概念を抜きには行えないのである。言い換えれば、T形式を持たない孤立語には主要な3つのカテゴリーのうちの1つが単に欠落しているのではなく、残るA形式とM形式の存在についてもその根底から見直す必要がある。

るのではないだろうか。

このような問題意識の下に、本研究では、まず時と出来事の関係について、フッサール (Edmund Husserl) の現象学における「生活世界」(Lebenswelt/life-world) の観点から考察を試みる¹。

出来事は時の流れに基づいて認識されるという通念があるが、我々の主観においては、逆に出来事の推移の認識自体が、時の流れを「推量」するための間接的な根拠とされていると感じられる。あるいは「時」の概念と「出来事」の概念は、相互に規定し合う関係にあるというべきだろうか。

本研究では、我々の主観的認識における出来事の推移と、時と出来事についての自然言語の表現面との関係の具体的な考察例として、タイ語の句末詞 *leew* の分析を行う。

以下ではまず、主観的認識における時と出来事の関係の考察を行い、客観的事象と主観的出来事を区別するための表記法を暫定的に導入する。この表記法の有効性を検証するための具体的分析の一例として、タイ語の句末詞 *leew* の分析を行う。

leew は従来、完結相 (perfective aspect) を意味すると分析されてきた。

しかし生活世界の出来事という観点から見ると、*leew* は T 形式を前提とした西洋近代語の A 形式の分析の枠組みにはおさまらない、「生活世界における局面の新展開」という主観的認識の表現であることを明らかにする。

1.1 本研究の方法論

本節では、時と出来事という二つの概念と、それに対する人間の認識について考察するために、客観的事象と主観的出来事との区別について述べる。端的に言えば、客観的事象は、それを観測する人類が減んだとしても、その

1 本稿の客観的事象と主観的認識に関する考察は、現象学における「生活世界」を自然言語の表現面から考察する原初的な試みである。「生活世界」の概念については、野家 (1994) を参照されたい。フッサール以降、現代に至るまでの現象学の展開や、その今日的な意義については、筆者の理解は到底及ばないが、現在の言語学における言語の記述と分析について、現象学的な観点から理論的に見直すことには一定の意義があろうと考える。

事象の生起・消滅を論じることができるが、主観的出来事とは、客観的事象について人間が主体的に捉えた「事象の見え方」を含んでいる。

例えば、地球が太陽に対してほぼ24時間で自転することは客観的事象である。しかし地球上の一点にいる我々は、その事象を観測と推論に基づく間接的知識としてしか理解できない。「ある周期をもって太陽が昇り、再び沈むこと」が、我々が経験する主観的出来事である。際限なく繰り返されたこの経験の積み重ねが、我々の「生活世界」および「時」の意識を形成してきた。この「時」の意識が自然言語の「出来事の叙述」に根強く反映していることは、地球の自転が確実な客観的事象であるという知識が自然科学によって一般化されて以降も、我々は相変わらず「日が昇る」という表現を使い続けている事実から明らかである。

このような「出来事」の叙述とは、フッサールの現象学における「生活世界」において生起・消滅するものに関する主観的認識の叙述である。この「出来事」の叙述の際の自然言語の表現形式には、我々の主観的認識のあり方が反映している。従って、人間の主観的認識のあり方を解明するために、自然言語の具体的な表現を分析することが有力な手がかりになると期待される。

1.2 「時」と「出来事」に関する一考察

客観的事象としての実時間の観測と、生活世界における出来事の生起に関わる「時」の主観的認識とは、次元を異にしている。

時刻を表示できる時計を用いて、客観的事象の生起・消滅を観測する場合には、事象が生起した時点（Time Point）と、その事象が消滅した時点とを観測して得られた両者の差分が「事象の生起から消滅までの経過時間」である。

一方、「生活世界での出来事を主観的に経験しているに過ぎない」我々は、実時間の経過という客観的事象を直接認識することはできない。我々に実感されるのは「出来事の変化」から推測される「時」だけである。我々の「時」は実時間に完全には対応しない。時刻を表示できない砂時計に例える

と、ある局面（Phase、以下 P_1, P_2 などと表す）とそれに続く局面における容器中の砂の量の差分に基づく「砂時計の時」の方が、我々の生活経験における「時」の実感とよく合致している。

1.3 記号体系と表記法の導入

以下では、客観的事象としての実時間 T の観測と、「生活世界の出来事」の局面 P に関する主観的時間の認識とが、異なる次元の存在であることを明確化するため、若干の記号を用いた表記法の暫定的な導入を試みる。この表記法の導入は、時制あるいは発話現在時の概念を用いずに「アスペクト」についての一貫した説明を行うための試みである。

一定の時間に生起・消滅する客観的事象は、一次直線で表した時間軸上の特定の時点（ T_1 ：以下 T_1, T_2 …などと表す）を生起点とし、それよりも後の時点（ T_2 ）を消滅点とする線分として表示することができる。線分の長さ（ $[T_2 - T_1]$ と表す）は、ある客観的事象が開始してから終了するまでの時間（期間）の客観的表示である。

- (1) a. T_n ：客観的事象における実時間上の時点。数直線上の点 T_0, T_1, T_2 …など。
- b. $[T_1 - T_0]$ ：時点 T_0 から時点 T_1 までに経過した測定可能な時間量。
- c. $[T_0 \rightarrow T_1]$ ：時点 T_0 から時点 T_1 への観測可能な時間の経過。

一方、主観的な生活世界において、ある出来事（Happening）は、必要に応じて2つ以上の局面（Phase）に分割される（ $H \rightarrow P_0, P_1, P_2$ …と表す）。この分割は局面間に認められる何らかの差異に基づいて行われる。

以下では「生活世界内で起きる出来事の一局面」を P で表す。 P は観察したり、第三者にその内容を事実として報告可能である。一方、主観的内省に現れる「記憶、夢、未然の出来事」などの観念的なエピソードの一局面を波カッコ{ }内の $\{P\}$ で表す。 $\{P\}$ は主観的な認識のうちにあるが、その実在は問題にされない。

- (2) a. P_n : 生活世界で観察される出来事の一局面。 $P_0, P_1, P_2 \dots$ など。
 b. $\{P_n\}$: 生活世界で想起されるエピソードの一局面。 $\{P_0\} \dots$ など。
 c. $[P_1 - P_0]$: 局面 P_0 と P_1 との差分、即ち局面変化の主観的認識。
 $[P_1 \gg P_0]$ のように、差分が何らかの閾値を超えるほど十分大きい場合は、差分の認識が可能。
 d. $\{P_0 \rightarrow P_1\}$: 局面 P_0 から局面 P_1 への主観的変化。「変化」は局面の差分が一定程度大きくなり、何らかの閾値を超えないと認識できない。

我々は、生活世界における出来事2局面の間の差分の認識 $[P_1 - P_0]$ を、この「客観的事象としてのある実時間の経過」である差分 $[T_1 - T_0]$ に比定することによって、出来事の主観的な認識を、あたかも客観的事象の測定結果の記述であるかのように、無自覚のうちにすり替えていると考えられよう。この比定による認識のすり替えを (3) のように表すことにする。

- (3) $[P_1 - P_0] \approx [T_1 - T_0]$: 主観的出来事の「時」と客観的事象の「時」のすり替え。

実在と感じられる P であっても、観念的なエピソード $\{P\}$ であっても、ともに「対比、類推、推論」といった心的活動の対象になるため、以下の (4) のような操作が可能である。

- (4) a. $[\{P_0\} \rightarrow P_1]$: 局面 P_1 の認識から逆算して、先行する局面 $\{P_0\}$ から P_1 への主観的変化が起きたと推定すること。
 b. $[P_1 \rightarrow P_2]$: 既に認識された局面 P_1 からの展開として、新たな未然の局面 P_2 への主観的変化が起きると推定すること。

常に大量の体内外からの情報の洪水に晒されている人間には、(2) c, d で

触れたように、ある瞬間における $[P_1 - P_0]$ が十分に大きくない場合はそれを無視し、大きい場合はそれを重要な「変化」として認識上の焦点とする特性がある。

以下の (5) は、局面 $\{P_0\}$ が潜在的にさえ存在しない点で、(4) の特殊な場合であると考えられる。ある出来事が生じている局面 P に対して、その出来事が生じていない局面を $\neg P$ で表すと、 $\neg P$ という局面から、 P という局面への展開の認識は、「前提ゼロからの発見」という心的な認知活動における重要な認識である場合に生じる。この「発見」の認識を、新規の記号表現 $[//]$ を用いて (5) b. のように表すことにする²。

(5) a. $\neg P$: 局面 P が生じていないこと。

b. $[\neg P // P]$: まだ局面 P が生じていない局面 ($\neg P$) から、生じた局面 P への新展開を「発見」すること。

以上の記号と表記法について、§2以下でタイ語の時と時間の表現を取り上げて、その有効性を検証することにする。

1.4 タイ語の言語類型上の特徴

タイ語は、形態類型上、名詞・動詞などの語形態が変化しない孤立語である。統語上、「主語 + 動詞 + 目的語」、および「名詞 + 形容詞」、「助動詞 + 動詞」、「前置詞 + 名詞」を基本語順とする。

さらに本稿で取り上げる「時・出来事」の表現に関わる情報構造上の特徴として、主題卓立型言語 (topic prominent language) であるという特徴がある。タイ語では文頭に主題が置かれ、それについて何らかの叙述がなされる場合、特別な主題標識を必要としない³。

2 §2.1.3で述べるように、「発見」は、Boonyapatipark (1983) の「変化あるいは新状況の認識」という観察の「新状況の認識」に相当するものである。

3 特に主題を転換したり、明示したりする場合には、迂言的な主題標識を用いることもある。例えば、特に対比的な主題の場合、ruang (話) を主題を表す名詞に前

主題には、その指示対象と先行文脈によって、特定の対象へと向かう「指向 (aboutness) 機能」、「対比 (contras) 機能」、「前景化 (foregrounding) 機能」などの機能があるが、時の表現と関わる機能としては、主題である時間詞が後続の叙述の時間的背景を設定する「場面設定 (scene-setting) 機能」が注目される。

タイ語の発話 (文) に現れる「時」および「出来事」の表現に関わる形式は、A形式、M形式に対応する形式を含む機能語類と、時を表す名詞類 (時間詞) および動詞類という実質語類とに二分される。ただし動詞以外の要素の出現は選択的であって、義務的ではない。

2. 時と出来事の表現形式の概要

本研究では、タイ語の時と出来事の表現の分析に「層」(layer) という概念を導入し、時と出来事の表現が機能語からなるA層、D層、F層の3層と、実質語からなるT層、V層の2層とに現れると仮定する⁴。

各層を構成する形式とそれぞれの意味は、およそ次の通りである。ただし各層の名称は暫定的なもので、今後の検討を要する。

A層 [連用限定詞]: いわゆる「助動詞」の層。出来事の「起動・開始の様態」を表す。

D層 [方向動詞]: 空間移動・所在を表す方向動詞 (Directive verb) の一部からなる層。「時間の経過あるいは継続」を表す。

置して、「～については、～の話は」のように主題を明示することもある。タイ語の主題については峰岸&ウィッターヤンバンヤーン (2019) を参照されたい。

- 4 本研究でいう「層」概念について詳述することはできないが、複数の版木を重ねて多色刷りの版面を作るように、時の概念が多層的に表現されると考えておく。例えばD層の方向動詞pay (行く) (来る) は、A層でもモダリティーを表す。このように空間直示から時間直示、さらには心理的ウチソトの直示表現へと意味が拡張される場合、形態統語レベルでのスロット的記述をすると、全ての位置に共通する基本的な直示性は間接的にしか記述できなくなるという問題がある。これらを「同一層にある」と記述することで、この問題を回避できないか、さらに検討すべきである。

F層 [句末詞]：句末詞 (Final Particle) $l\epsilon\epsilon w$, $l\alpha\alpha y$ などからなる層。「出来事の局面開」を表す。

T層 [時間詞の層]：主題位置にある時間詞の層。時間場面を設定する。

V層 [動詞の層]：単独の動詞および動詞連続 (Serial Verbs) からなる層

T層の時間詞は、§1.4に挙げた主題機能を担う。

V層の動詞は、それ自体が語彙的なアスペクトを持つとされる。動詞はA層、D層、F層あるいはT層と共に共起する場合だけでなく、動詞単独で出現する場合 (複合動詞を含む) もある。さらに、動詞連続として出現する場合は、「出来事の開始と終了との対比・様態」を表す場合もある。本稿では主にF層、T層およびV層の分析を行う。

2.1 句末詞 $l\epsilon\epsilon w$ の分析

以下では、§1.3で導入した表記法の有効性を検証するための具体的分析の一例として、タイ語の句末詞 $l\epsilon\epsilon w$ の分析を行う。

F層 (認知・談話レベル) の句末詞 $l\epsilon\epsilon w$ は、元来「完了する」の意味の本動詞が文法化したものである。 $l\epsilon\epsilon w$ は句末 (文末) に現れるだけでなく、文頭の接続詞「そして」を始め、文の接続を表す多様な慣用句にも現れるが、いずれも本稿でいう「局面の新展開」あるいは「視点の転換」(例： $no\alpha k3 = ca\alpha k2 = nii4 = l\epsilon\epsilon w4$ 「この他に」など) の意味をもつ点で、文頭あるいは文末という統語上の出現位置に関わらず、同一のF層に現れると考える⁵。

Iwasaki & Ingkaphirom (2005: Ch.12) はアスペクトの記述で $l\epsilon\epsilon w$ を取り上げている。同書はComrie (1976) の定義に従って、完結相 (perfective) を「状況を外側からみて、一つの完全なまとまりとして見るアスペクト」と定義し、完了相 (perfect/anterior) を「現在の状況を特定の状況との関わりにおいて見るアスペクト」と定義している。その上で、 $l\epsilon\epsilon w$ に完結の $l\epsilon\epsilon w_1$ と完了 (perfect/anterior) の $l\epsilon\epsilon w_2$ とを区別し、前者は動作動詞の示す出来事と次の出

5 $l\alpha\alpha y$ (過ぎる) については未検討であるが、暫定的にF層に属すると考えておく。

来事の前後関係を表し、後者は「そうでない状態からそうである状態への変化の臨界点を表す」としている。特に後者の分析は、Boonyapatipark (1983: 159) の「変化あるいは新状況の認識」という、母語話者としての観察とも一致する点が注目される。

leew₁が「完結・前後関係」を、leew₂が「完了・変化の臨界点」を表すというIwasakiらの分析は、中国語の動詞の後に置かれる動態助詞「了1」と文末の語気助詞「了2」の分析に倣ったものようである。しかしComrie (1976) の定義では「完結」と「完了」は異なる意味をもつため、なぜこのような両義性を持つのかについての説明が必要である。また、タイ語で完了相に相当するのは、むしろD層の方向動詞のうち、時間の経過を直示的に表すmaa (来る)、pay (行く) および時間的継続を表すyuu (いる) である。両者とleewの意味の違いについても明らかにすべきである。

本稿の分析では、Iwasakiらのleewの2つの意味の違いは、両者の出現環境によるもので、「ある出来事の局面 (P_1) から次の局面 (P_2) へと展開した (あるいはさらに次の局面 (P_2) へと着実に展開する) という認識」を表す、認識レベルの標識であると考えられる。

一方、§2.2に述べるように、タイ語では完結相の標識としてleewを用いることはない。完結相は、時間詞と動詞の単独形とを用いて表す。

以下では、従来の分析を修正すべき根拠となる例文を中心に分析する。今後、中国語「了」との相違の分析をすることを念頭に、タイ語に対応する中国語の例文として、主にChao (1968) の「了 (le1/le2)」の例文を選び、「趙-le1」などと記してChao (1968) の説明の概略を「 」内に、簡体字化表記を【 】内に示す。また、本研究のために新たに追加した黄海萍氏による中国語訳には「(黄)」と記して簡体字表記を【 】内に示す。

2.1.1 「新局面への展開」の leew

タイ語では現在の完結した出来事にleewは不要である。出来事 H が対比的な局面 P_1 と、それに後続する局面 P_2 と見なされるようになると、両者の差分 [$P_2 - P_1$] から推量される P_1 から新局面 P_2 への展開 [$P_1 \rightarrow P_2$] を表現するた

めにleewを用いる。以下の例文では声調（中平、低平、下降、高平、上昇）を、それぞれ音節末音に1から5の数字をつけて表す。

以下では、丸かっこで括られた語句は、選択可能な語句であることを示すが、選択するかしないかによって、文の意味が異なる。

- (6) chan4 pen1=wat2 (tæ2 haay5 leew4)
私 風邪をひく 逆接 治る 展開
私は風邪を引いたが、もう治った。cf.(黄)【我感冒了。(现在已经好了)】

(6) は、Iwasaki & Ingkaphirom (2005) の「完了・変化の臨界点」を表すleew₂の典型例に相当する。

単に「私は風邪を引いた」という独立した出来事 H を述べる場合はleewを用いない。しかし、「風邪を引いた」という以前の局面 P_0 があって、それから「今はもう治った」という新局面 P_1 へと展開したことを表す場合（ $[P_0 \rightarrow P_1]$ ）は、後続する局面 P_1 にleewを用いる。

次の(7)は、前件の局面 P_0 が明示されずに含意（以下、「含意」はimplicatureであり、entailmentではない）されている例であると考えられる。

- (7) (ŋan4) chan4 may3 pay1 (leew4)
[接続：それなら] 私 否定 行く 展開
それなら私は行きません。
cf. 趙 -le2「状況を示す結果節」【那我就不会走了。】

(ŋan) および (leew) がない場合、即ち「私は行かない」という独立した出来事 (H) の叙述である。一方、ŋanおよびleewがある場合、「行こうと思っている」という先行する局面 $\{P_0\}$ が記憶にあったが、例えば何らかの新しい情報を得るなどの状況の変化によって気が変わり、「それなら、やっぱり行かない」 P_1 という新局面への展開 $[\{P_0\} \rightarrow P_1]$ が生じたことを含意している。

以上の例から、leewの使用・不使用には、以下のような条件があると考え

られる。

- (8) a. **単独の事実の表現**：出来事を単独の事実として語る場合は、動詞単独形で表す。
- b. **局面の展開の表現**：ある局面 P_0 が先行し、 P_0 から新局面 P_1 への展開 $[P_0 \rightarrow P_1]$ を認識して語る場合は、leewを使う。
- c. **潜在的局面の展開の表現**：ある局面 P_1 について、それ以前の潜在する主観的な局面 $\{P_0\}$ を念頭に置き、そこから新局面 P_1 への展開 $[\{P_0\} \rightarrow P_1]$ を想定して語る場合は、leewを用いてその潜在的局面の存在を含意する。

2.1.2 「確述」の leew

(9) は「確述のモダリティ表現」というべきものだが、(8) c の潜在的局面の含意の表現と同様の表現であると考えられる。

- (9) may3 miil aray1 diil kwaa2 nii4 (leew4)
否定 有る 不定：何] 良い ~より これ 完結
これより良いものなどありません！
cf. 趙 -le2「明らかな状況」【再好没有了！】

(6), (7) と同様に、「これより良いものはない」という事実 H を述べる場合はleewを使わない。一方、叙述の内容が確実であることを強調する表現の場合は、この事実を述べる局面 P_1 に先立って、「より良い何かがないかを内省して探索しても見つからない」という局面 $\{P_0\}$ が潜在的に存在していて、「やっぱり、これより良いものはなかった」と確信する局面 P_1 だけが表現されている。言い換えれば、 $[\{P_0\} \rightarrow P_1]$ の展開がleewによって含意されている。

2.1.3 「発見」の lɛɛw

(10) は、バス停でバスを待っていて、「バスが来るのが見えた」という新しい事態の認識、「発見」を表す例であるが、Iwasaki & Ingkaphirom (2005) の「完了・変化の臨界点」を表す lɛɛw₂ の例に相当する。これも、(8) c の例であると考えられる。

- (10) rot4-mee1 maal (lɛɛw4)
バス 来る 完結
バスが来た！ cf. (黄) 【公交车来了！】

(7), (9) と同様に、「バスが来る」事実を述べるには lɛɛw は不要である。一方、バス停でバスが来ない時間、バスを待つ局面 P_0 は、言明されてはいないが現実の局面である。 P_0 からバスが見える新局面 P_1 への展開が成立した時点で lɛɛw が用いられる。 $[P_0 \rightarrow P_1]$ は、明言されない現実である局面 P_0 を含意する⁶。

(10) は「バスが来るのは見えたが、まだバス停までは到着していない」という場面であっても用いることができる点で、(10) は過去でもないし、厳密には完了相 (perfect) とも呼び難い。

2.1.4 「促し」の lɛɛw

(11) は、電話の話が長くなったので、そろそろ話を切り上げたい場面での発言である。lɛɛw だけでなく、句末助詞 na? が必要である。

- (11) waan1 = say5 lɛɛw4 na?
電話を切る 完結 終助詞：促し
もう電話を切るからね！ cf. (黄) 【挂电话了／吧。】

6 より厳密に表現すれば、「バスを待っていてバスが来た」場合は $[P_0 \rightarrow P_1]$ であるが、「バス停に通りかかったら偶然バスが来た」場合は「前提ゼロからの発見」 $[\neg P // P]$ である。

日本語では「電話を切ったよ」とは言えないが、話し手の気持ちを表現するならば、「切るよ」よりも「切るからね」と促していると言えよう⁷。

新局面への展開の観点からは、話し手が現在電話中である局面 P_1 にありながらも、「もう話は終わりにする、電話を切って、食事する」などの、後続する未然の新局面 $\{P_2\}$ に展開することに心が移っていると説明できよう。 $[P_1 \rightarrow \{P_2\}]$ は、未然の新局面 $\{P_2\}$ への展開が想定されていることを含意する。

2.2 T層：時間詞とV層：動詞による完結の表現

タイ語では時間詞と動詞の単独形（A層、D層、F層の形式を伴わない場合）を用いる場合、(a) 時間詞を主題にして時間の場面設定をして出来事を叙述するか、(b) 叙述内容の一部である出来事の生起した時間を焦点化して述べるかによって、語順が異なる。タイ語の情報構造については峰岸（2019a, 2019b, 2019c）を参照されたい。

主題の時間詞とともに動詞の単独形を用いることで、過去の独立した出来事の表現、すなわち完結相の表現となる。ともに $leew$ は不要である。

- (12) a. $t\text{oon}1=chaaw4$ $mua3=waan1$ $chan4$ $khian5$ $cot2=maay5$ $saam5$ $chabap2$
朝 昨日 私 書く 手紙 三 通
昨日の朝、私は手紙を3通書いた。cf. (黄) 【昨天早上、我写了三封信了。】
- b. $chan4$ $khian5$ $cot2=maay5$ $saam5$ $chabap2$ $t\text{oon}1=chaaw4$ $mua3=waan1$
私 書く 手紙 三 通 朝 昨日
私は昨日の朝手紙を3通書いた。cf. (黄) 【昨天早上、我写了三封信。】

タイ語の動詞の単独形は、先行文脈によって「自然法則、個人の習慣」など、「一般に起きる可能性のある出来事」、「現在起きている出来事」、「既に

7 市場の日本語で「安いよ、(さあ)買った、買った!」と言えるのも、売り手の内心で $[P_1 \rightarrow \{P_2\}]$ への展開が既に生じているとも言える。

起きた出来事」のいずれも表す可能性がある。これらは日本語の動詞終止形や英語の直説法現在形と同様の、いわば「話し手にとって経験可能な出来事、あるいは既に経験し、これからも現実として起こりうる出来事」の意味を持つとまとめることができよう。

時間詞の機能を考える上で、年表について述べておきたい。

「年表」は、過去の独立したひとまとまりの出来事の典型的な表現である。年表では、過去の一時点の表現に動詞の単独形が後続する。タイ語や中国語だけでなく、日本語、英語、フランス語などでもこの表現形式が一般的であるが、これが完結相に関連して分析されてこなかったのは、アスペクトをもっぱら動詞の文法カテゴリーと定義したために、時の名詞が時間を表現するという当然の事実には注意が払われてこなかったためではないだろうか。

3. まとめと考察

自然言語を用いて時について言語的に表現することは、「出来事」に関わる話し手の主観的表現と密接に関わっている。「出来事」とは、人間の主観で捉えた「事象」(event)のあり方の見え方の表現を含む。自然言語は、客観的事象よりも、むしろ主観的出来事を表現する機能を持っている。

本研究では、客観的事象とフッサールの「生活世界」における「時」と「出来事」の表現とを区別するために、一連の記号および表記法の試験的導入を試みた。この表記法の導入は、時制あるいは発話現在時の概念なしに「アスペクト」についての一貫した説明を行うために必要であると考えて行ったものである。

この表記法の有効性を検討するために、タイ語のF層の句末詞 *leew* の分析を行った。その結果、従来完結相とも完了相ともされてきた *leew* は「ある局面 P_1 から新局面 P_2 への展開を表す」と、一貫して分析することができた。

本稿では詳しく論じることができなかったが、タイ語の時と出来事の表現は、A層、D層、F層、T層、V層によって、多層的に表現されているのではないかと考えられる。その根拠として、層による時と出来事の表現の役割分担が考えられる。

A層の連用限定詞のうち、A形式には、「未然」、「将然」、「開始」、「進行」など、出来事が一見多様な意味を持ちながらも、「終了」相がないという特徴がある。一方で終了相は、V層の動詞連続 V_1+V_2 の V_2 で表現されるのである。

T層の主題の位置の時間詞は、単独の動詞とともに現れる場合、「出来事をひとまとまりのものと見て表現する」完結相の定義に合致する意味を表す。TAM形式の議論で重視されてこなかった年表については、孤立語に限らず、西洋語を含む多くの言語で「年および動詞単独形（直説法現在形）」が用いられているという普遍性に注目すべきであろう。

【謝辞】

タイ語のコンサルタントは、スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン（斎藤）氏である。タイ語の用例の一部については、黄海萍氏（一橋大学大学院言語社会研究科・特別研究員）の御協力により、中国語訳を付した。ここに記してお二人に感謝の意を表する。

参考文献

- Boonyapatipark, Tasanalay 1983. "A Study of Aspect in Thai". Diss. School of Oriental and African Studies, University of London. Print.
- Chao, Yuen Ren 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. University of California Press.
(赵元任 2005. 『汉语口语语法』商务印书馆.)
- Comrie, Bernard 1976. *Aspect*. Cambridge University Press.
- Comrie, Bernard 1985. *Tense*. Cambridge University Press.
- Iwasaki, Shoichi & Preeya Ingkaphirom 2005. *A Reference Grammar of Thai*. Cambridge University Press.
- Noss, Richard 1964. *Thai Reference Grammar*. Washington: Foreign Service Institute, Department of State, United States Government.
- 野家啓一 1994. 「生活世界」木田元、野家啓一、村田純一、鷺田清一（編）『現象学事典』 pp.259-263. 弘文堂.
- 峰岸真琴 2019a. 「タイ語の数量表現」『言語の類型特徴対照研究会論集』第1号. pp.115-132. 日中言語文化研究社.
- 峰岸真琴 2019b. 「タイ語の情報構造に関わる諸表現」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』50号 pp.189-204.

- 峰岸真琴 2019c. 「タイ語のとりたて」野田尚史（編）『日本語と世界の言語のとりたて表現』 pp.129-144. くろしお出版.
- 峰岸真琴&スニサー・ウィッタヤーパンヤーノン 2019. 「タイ語の主題とその談話での現れ方について」『言語の類型特徴対照研究会論集』 第2号. pp.111-135. 日中言語文化研究社.